

実際の露光より二段階速いシャッター速度で撮影した。このような方法で何んとか、降雪風景を写し撮り、それを表現できたのではなにかと思っている。

教材写真から始まり、これをベースにして同志社今出川キャンパスに繰り広げられる四季折々の変化を、写真展と写真集にまとめてみた。何気なく毎日みているキャンパス風景も、季節と時間帯を選んできると意外な顔を見ることができた。

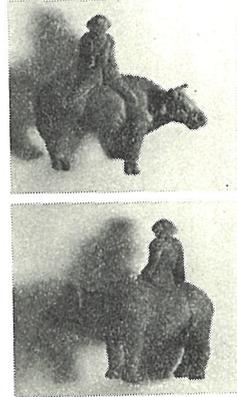
同志社時報編集委員会より、撮影のエピソードを記せということであったが、それに値するものがあつたかどうかよくわからない。ただ、根気よく地道にキャンパス風景の移り変わりを追いつけてきたことに尽きると思ふ。

(中学校教諭)

同志社校地出土の埋蔵文化財 (7)

鈴木 重治

童子騎牛像



(大学図書館地点で、一九七二年九月二
八日、第二トレンチ第二層より出土)
像高・八、三〇、安土・桃山時代

今出川校地の南西部にあつた、啓真館と聚芳館の木造建築が撤去された機会に、埋蔵文化財の発掘調査がおこなわれた。一九七二年の秋のことであり、大学図書館の建築に先立つ学術調査であつて、同志社大学校地学術調査委員会による第一回目の発掘調査でもあつた。

この調査中、南に寄つた第二トレンチ(発掘坑)の第二層から、中国産の輸入陶磁器や、京都産の土師皿などに混じつて出土したのが、ここに示す童子騎牛像である。

灰黒色を呈している瓦質の胎土は、よく精選されたきめ細い良質の素地であつて、室町時代から安土・桃山時代の瓦の胎土に極似している。鬼瓦などの造形にかかわつた瓦師の作品と考えられること、牛の背に横座りする童子の形態から、近世に入つてから全国の土人形に影響を与えたという伏見人形に關係する資料とみられる。型作りの伏見人形に先行する古式のタイプに属して、瓦質土偶の変遷史上、注目される作品である。

露おらかな表情の童子と、肉付きの良い牛とのバランスもよく、目、鼻、耳、爪、尾などの細部についても刺突孔や、ヘラオサエに心にくいばかりの配慮がうかがえる。

年代については、同時に出土した遺物のほとんどが、室町時代から江戸時代にかけてのものであり、下層で確認された三枚の焼土層中の遺物も含めて、考古学的方法での層位の確認によつて、一六世紀後半と考えられている。しかし、暦年代などの絶対年代については、類例の確認をまつて決定すべき資料である。

この作者は、相国寺に伝わる重要文化財の周文筆「十牛図」をみているのかもしれない。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任)